

繁殖豚実態調査について

松川 善昌 大城 弘四郎

I はじめに

今後の試験研究の参考にする目的で、野外における繁殖豚の飼養状況について聴き取り調査を行なったので、その概要を報告する。

II 調査方法

1. 調査年月日

1977年11月～1978年2月

2. 調査対象

種雌豚を5頭以上飼養する農家を、沖縄本島全域から50戸（北部地区10戸、中部地区20戸、南部地区20戸）ランダムに選定した。

III 調査結果および考察

1. 経営の種類

経営の種類は一貫経営54%（27戸）、繁殖経営46%（23戸）であった。

新井は1977年の全国における飼養形態は、肥育経営23.6%、繁殖経営54.6%、一貫経営21.8%と報告している¹⁾。繁殖経営と一貫経営のみに換算すると繁殖経営71%、一貫経営29%となり、本調査の結果とは異なる傾向であった。

2. 経営規模

(1) 種雌豚の飼養規模

種雌豚の飼養規模は表1のとおりである。

表1 種雌豚の飼養規模

飼養規模（頭）	10頭以上	11-20頭	21-30頭	31-40頭	41-50頭	51-60頭	61頭以上
農家戸数（%）	16	30	20	16	6	2	10

11-20頭規模が30%と最も多く、次いで21-30頭規模の20%であった。一戸当たり飼養頭数は32.9頭であり、経営別では、一貫経営で33.6頭、繁殖経営で32.1頭と差は少なかった。

(2) 種雄豚飼養状況

種雄豚飼養状況は、種雌豚飼養規模別の種雄豚平均飼養頭数および種雌豚に対する種雄豚の割合（種雄豚飼養頭数÷種雌豚飼養頭数）に分類して表2に示した。

表-2 種雌豚飼養状況

種雌豚飼養規模	10頭以下	11 - 20	21 - 30	31 - 40	41 - 50	51 - 60	61頭以上
種雌豚平均飼養頭数	1.0	1.6	2.0	2.4	2.0	2.0	6.0
種雌豚に対する種雄豚の割合	0.13	0.16	0.08	0.07	0.05	0.03	0.05

種雌豚に対する種雄豚の割合 = 種雄豚飼養頭数 ÷ 種雌豚飼養頭数

種雌豚の割合は、10頭以下の規模で0.13、11-20頭規模で0.10、21-30頭規模で0.08であり、種雌豚の飼養規模が拡大するに伴い低下する傾向がみられた。

種雌豚の割合別における農家戸数は、0.05未満の農家24.0%、0.05以上0.07未満の農家20.0%、そして0.07以上の農家が56.0%であった。種雌豚に対する種雄豚の割合は0.05~0.07(種雌豚15-20頭に対して種雄豚1頭)が標準とされており、24.0%の農家では種雄豚の飼養頭数が標準以下であった。

(3) 種雌候補豚の飼養状況

種雌候補豚の飼養状況は、種雌豚飼養規模別の種雌候補豚平均飼養頭数および種雌豚に対する種雌候補豚の割合(種雌候補豚飼養頭数 ÷ 種雌豚飼養頭数)に分類して表3に示した。

表-3 種雌候補豚飼養状況

種雌豚飼養規模	10頭以下	11 - 20	21 - 30	31 - 40	41 - 50	51 - 60	61頭以上
種雌候補豚平均飼養頭数	3.8	7.4	9.1	6.5	6.0	10.0	10.8
種雌豚に対する種雌候補豚の割合	0.52	0.49	0.31	0.18	0.14	0.17	0.13

種雌豚に対する種雌候補豚の割合 = 種雌候補豚飼養頭数 ÷ 種雌豚飼養頭数

種雌候補豚の割合は、10頭以下の規模で0.52と最も高く、次いで11-20頭規模の0.49、21-30頭規模の0.31の順であり、種雌豚の飼養規模の拡大に伴って低下する傾向がみられた。

種雌候補豚の割合別における農家戸数は、0.35以下の農家が70.0%、0.35以上0.50未満の農家が8.0%、0.50以上の農家が22.0%であった。種雌豚に対する種雌候補豚の割合は、0.35(種雌豚飼養頭数100頭に対し種雌候補豚飼養頭数35頭)⁵⁾が標準であるので、70%の農家は、種雌候補豚の飼養頭数が不足しており、その中には全く種雌候補豚を飼養していない農家が18%あった。

3. 繁殖供用開始月令

種雌豚の繁殖供用開始月令は、表4のとおりである。

表-4 繁殖供用開始月令

供用開始月令	8カ月令未満	8カ月令	9カ月令	10カ月令	10カ月令以上
農家戸数(%)	12.6	37.2	16.7	29.2	4.3

8カ月令が37.2%と最も多く、次いで10カ月令の29.2%であった。また、繁殖供用には早すぎる8カ月令以下が12.6%もあった。

4. 種雌豚の飼養形態

種雌豚の飼養形態で一番多いのが群飼の58%、次いで単飼32%、放飼10%の順であった。

群飼の構成は、5頭以下が55.2%で最も多く、次いで6-10頭、31.0%、11頭以上が13.8%であった。

5. 運動場

(1) 有 無

運動場を有する農家64%、有しない農家36%であった。運動場の床構造は、土62.5%、コンクリート28.1%、コンクリート床にオガクズを敷料として使用6.3%、コンクリート床に砂を入れているもの3.1%であった。

(2) 面積

種雌豚1頭当たりの運動場面積は、表5のとおりである。

表5 種雌豚1頭当たり運動場面積

面積 (分布) (㎡)	1 ㎡ 未 満 (0.07-0.96)	1 以上 3 未 満 (1.2-2.3)	3 以上 5 未 満 (3.0-4.91)	5 以上 10 未 満 (6.19-4.91)	10 ㎡ 以 上 (10.0-45.0)
農 家 戸 数 (%)	18.2	15.2	24.2	12.1	30.3

0.07㎡-45.0㎡と範囲は広いが、大部分(57.6%)は5㎡未満であった。

(3) 運動方法

種雌豚の運動方法は、豚房に運動場を接続し、自由に運動させている農家が22%、交替で運動場に出しているのが38%、追い運動によるのが2%、特に運動をさせていないのが38%であった。

6. 繁殖成績

繁殖成績については以下のとおりである。

(1) 分娩回数 (回1年)

2回以下の農家12%、2回72%、2回以上16%であり、平均は2.02回であった。

(2) 産子数 (死産は除く)

6頭以下の農家0%、7-10頭76%、11頭以上24%であり、平均は9.8頭であった。

(3) 育成率 (35日)

育成率70%以下の農家6%、70%以上80%未満60%、90%以上34%であり、平均は88.2%であった。

新井は茨城県下における調査において、分娩回数1.92回、産子数9.7頭、育成率87.9%と報告しているが、本調査では、いずれの項目についてもわずかながら上まわる成績であった。

7. 種雌豚の淘汰

(1) 淘汰年令

淘汰年令は表6のとおりである。

表 6. 年令別淘汰状況

淘汰年令	2才未満	2以上3未満	3以上4未満	4以上5未満	5才以上
割合 (%)	4.2	25.0	41.6	16.7	12.5

3才以上4才未満が41.6%と最も多く、次いで2才以上3才未満の25.0%であった。

種雌豚の飼養規模別の平均淘汰年令は、21頭以下規模で3.5才、21-50頭規模では3.9才、51頭以上規模で3.8才で、ほとんど差はみられなかった。

(2) 産次別淘汰状況

産次別淘汰状況は表7のとおりである。

表 7. 産次別淘汰状況

項目 \ 産次	0	1産	2産	3産	4産	5産	6産	7産以上	合計
淘汰頭数 (頭)	3	10	11	10	12	15	9	17	87 頭
淘汰割合 (%)	3.4	11.5	12.6	11.5	14.0	17.2	10.3	19.5	100%

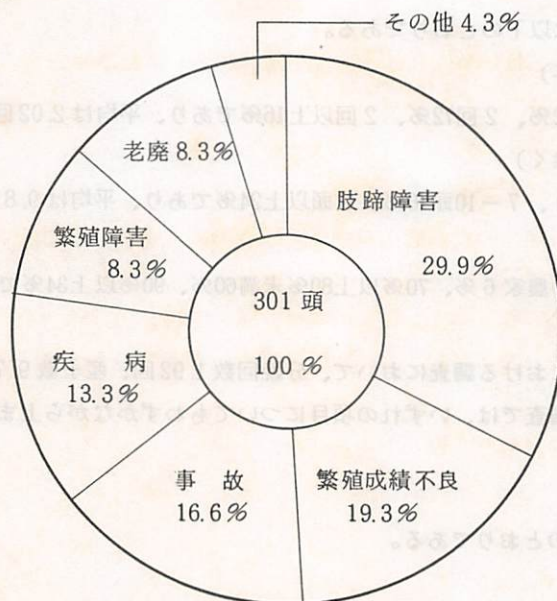
7産以上で淘汰されているのが19.5%で最も多く、次いで5産の17.2%、4産の14.0%の順であり、淘汰豚の61%は4産以降であった。

内藤ら⁴⁾は、産次を重ねるにつれ淘汰数が減少を示したと報告しているが、本調査では、各産次に平均的に分布しており、そのような傾向はみられなかった。

(3) 淘汰理由

種雌豚の淘汰理由および割合は図1に示すとおりである。

図-1. 淘汰理由



淘汰理由の明確な頭数は301頭であった。淘汰理由の内訳は、肢蹄障害(肢蹄損傷、脚弱、起立不能等) 29.9%、繁殖成績不良(産子数不足、哺育能力不足等) 19.3%、事故(骨折、子宮脱等) 16.6%、以後、疾病(トキソプラズマ症、³⁾コリネバクテリウム症、子宮内膜炎等)、繁殖障(無発情、不受胎)、老廃の順であった。大内、⁴⁾内藤らは不受胎による淘汰が最も多く、石井²⁾らは肢蹄損傷による淘汰が20.7-31.6%で最も多かったと報告しているが、本調査では、特に肢蹄障害が目立って多かった。

8. 種雌豚の肢蹄状態

農家で飼養されている種雌豚1,635頭について、肢蹄の状態を調査した結果、3.2%(52頭)に肢蹄障害がみられ、その内訳は、後肢の蹄部損傷46.2%(24頭)、脚弱53.8%(28頭)、前肢の蹄部損傷(後肢と併発)1.9%(1頭)であった。

IV 要 約

種雌豚を5頭以上飼養する農家を50戸ランダムに選定し、飼養状況について聞き取り調査を行った。その概要は次のとおりであった。

1. 経営の種類は、一貫経営54%、繁殖経営46%であった。
2. 種雌豚の飼養規模は11-20頭が30%と最も多かった。また、種雌豚の飼養規模の拡大に伴い種雌豚の割合および種雌候補豚の割合は低下する傾向がみられた。
3. 種雌豚の繁殖供用開始月令は8カ月令が37.2%で最も多く、次いで10カ月令の29.2%であった。
4. 運動場を有する農家は64%であり、種雌豚1頭当たり面積は大部分(57.6%)が5㎡未満であった。
5. 種雌豚の淘汰年令は3才以上4才未満が41.6%で最も多く、飼養規模別淘汰年令はほとんど差がなかった。産次別淘汰状況では、61%が4産以降であった。
6. 淘汰理由は肢蹄障害が29.9%と最も多く、次いで繁殖成績不良19.3%、事故16.6%の順であった。
7. 農家で飼養されている種雌豚1,635頭の3.2%(52頭)に肢蹄障害がみられた。

V 文 献

- 1) 新井肇、今後の養豚経営のあり方、養豚、農林水産省畜産局、1979。
- 2) 石井泰明他2名、養豚の一貫経営における繁殖豚の淘汰更新の実態について、千葉中核報告書、143-146、1974。
- 3) 大内清輝、繁殖豚の飼養と衛生、日本の養豚、28、No.10、10-17、1978。
- 4) 内藤昌男、加藤良忠、繁殖経営における繁殖豚淘汰の実態について、千葉中核報告書、147-152、1974。
- 5) 養豚経営の計画・設計指標一覧、中央畜産会、1976。